

ベルリン国立アジア美術館所蔵「扇面平家物語」についての一考察

中近世平家物語扇面画の受容

瀬谷 愛（山口県立美術館）

ベルリン国立アジア美術館（旧ベルリン東洋美術館）が所蔵する「扇面平家物語」（以下、ベルリン本）は、鎌倉時代に成立した軍記物語『平家物語』を全編にわたって細密に描き出した、詞書絵各 60 面一具の扇面画である。近年、発表者はこれを近くに拝見する機会を得、在外作品であることなどから本格的な考察が困難であったベルリン本が、近世初期扇面画として、また平家物語図の優品として、積極的に評価されるべき必要性を感じた。そこで本発表では、ベルリン本と徳川美術館（古筆手鑑「尾陽」所収。以下、徳川本）根津美術館（伝土佐光成筆「平家物語画帖」。以下、根津本）に所蔵される同図様の 2 件との比較、各々の位置づけを行い、中世後期から近世における平家物語扇面画の受容について試論を述べたい。

ベルリン本は、御雇ドイツ人医師として明治初頭に来日したハンス・ギールケが、土佐広周筆「天稚彦草紙絵巻」などとともに故国へ持ち帰り、明治 18 年（1885）ベルリンの民族学博物館へ譲ったコレクション中であつたものである（拙稿「1885 年収蔵のふたつのやまと絵—《天稚彦草紙絵巻》と《扇面平家物語》—」『美がむすぶ絆 ベルリン国立アジア美術館所蔵日本美術名品展』2008 年 4 月）。17 世紀土佐派あるいは住吉派の作品とみられるが、同じ 17 世紀の制作とされる徳川本 60 面、18 世紀の制作とされる根津本 120 面の図様と比較すれば、絵画化場面の重複や画面の質から、これらがもと一具であつた可能性は極めて低い。すなわち 17～18 世紀のあいだに共通の祖本をもつ、少なくとも 3 件の平家物語扇面画が制作されたことになる。

ベルリン本には絵と同じ大きさの扇面形にすべて一筆になる詞書 60 面も付属するが、徳川本や根津本にある「殿下乗合」や「那須与一」などの『平家物語』を代表する場面は存在せず、実際にはこれ以上の場面が絵画化されていたと考えることもできる。ベルリン本、また徳川本は本来、根津本同様 120 面程度の大部であつた可能性も残されているとみていいだろう。住吉派の鑑定控である「住吉家鑑定控」には室町時代絵所預土佐光信の娘千代筆として「小扇面 義経記之絵 五十七枚」がみられ、平家物語にかかる扇面画が多くの需要をもっていたことが推察される。

一方、これらがいずれも 60 面、あるいはその倍数の 120 面で構成されているということは、60 面一具の貼交屏風としての需要を意識して構成されたからとも考えられる。とはいうもののその受容のかたちは、極めて細密に描かれた武将や公家たちの姿を楽しむために、屏風の大画面より画帖の小画面のほうが適していたのではないかとも思われるのである。中世後期から近世初期の扇面画、細密画の題材として『源氏物語』や『伊勢物語』が好まれたことはよく知られているが、早く『実隆公記』文明 18 年（1486）5 月 19 日条にも細川氏が作った「平家絵扇流」屏風として登場する『平家物語』を題材とした扇面画について、多面的な解釈を試みたい。